Osaka University Knowledge Archive

Title	成化本『白兔記』譯註稿（三）
Author(s)	葛葉, 礼; 後藤, 安延; 高橋, 文治 他
Citation	中国研究集刊. 2005, 37, p. 94-111
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61148
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

中国研究集刊 致号（総三十七号）平成十七年六月 九四―一一一頁

成化本『白兎記』譯註稿（三）

加藤 聰　葛葉 礼　後藤安延　高橋文治
谷口高志　陳 文輝　冨永鉄平　西尾 俊

本稿は、本誌調號および雲號に掲載された「成化本『白兎記』譯註稿（一）・（二）」の續編（第九出途中より第十二出まで）である。凡例その他については、前稿を參照いただきたい。

[生白] 娘子、我去也。[旦白] 丈夫、那去。[生白] 我（賓）〔幷〕州太原府投軍去也。[旦白] 你去、我也去。[生白] 娘子、千山萬水、你去不的。[旦白] （計）〔既〕然我去不的、你有甚麼話、祝付我奴家（已）〔幾〕句。[生白] 娘子、我去則去、我有三不回。[旦白] 丈夫、那三不回。[生白] 不得官不回、不富貴不回、我死了不回。[旦白] 丈夫、未曾出門、說這等不吉利話。[生白] 娘子、我還有三件事祝付你。[旦白] 丈夫、又有那三件事。[生白] 我頭一件事、你身懷六甲、倘若是女、隨娘改嫁。倘若是箇小厮兒、好歹收留在此、接取我劉家香火。[旦白] 丈夫、你說話好差。是小厮兒也是劉家根基、是女孩兒也是你劉家的根基。丈夫、（弟）〔第〕三件事、如何說。[生白] 第三件事、說了不打之緊、把半年的夫妻的恩情都沒了。[旦白] 好歹要你說。[生白] 娘子、倘若你哥哥嫂嫂逼勒你不過、（減）〔揀〕强似劉知遠的、別嫁一（子）〔箇〕。[旦] 呸。

[註] ○三不回―「三不歸」「三不知」「三不留」「三不從」などとともに、「三不…」は一種の常套表現。「三不回」は「三不歸」と同意。（漢）は、「三不歸」の典據として『管子』「輕重丁篇」を擧げるが、「三」に必ずしも具體的內容を想定する必要はないだろう。ちなみに、汲本相當箇所の「三不回」の內容は成化本とやや異なる。なお、任半塘『敦煌歌辭總編』（上海古籍出版社、一九八七）卷三に收載される、敦煌曲子詞【長相思】「三不歸」三首は、末句にそれぞれ「此是富不歸」「此是貧不歸」「此是死不歸」といい、成化本がいう「三不回」の原型はこのあたりにあ

るかもしれない。（宋元）参照。　○身懐六甲―「六甲」は、元來は十干十二支を組み合わせた場合の六つの甲、すなわち甲子・甲戌・甲申・甲午・甲辰・甲寅をいい、そこから派生して星名・神名・方術名としても用いられる。また「身懐六甲」で、懐妊する、の意もあらわす。『隋書』巻三四「經籍志」（三）「子部」「五行」に婦人科の書と思われる「六甲貫胎書一卷」（佚）があるほか、明・朱橚『普濟方』巻一「方脈總論」「辯男女形生神毓論」の條は、「甲子は水神、之れが爲に血脈は調暢せられ……、甲戌は土神、之れが爲に肌肉は調理せられ……、甲申は金神、之れが爲に爪齒は緊固たり……、甲午は火神、之れが爲に五臟は和悅し……、甲辰は風神、之れが爲に胎息は保固せられ……、甲寅は木神、之れが爲に筋骨は濯鍊せらる。……信に婦人の妊娠を知りて之れを六甲と謂うは、豈に他有らんや」という。

○不打之緊―「不打緊」と同意。　○（減）〔揀〕―同音による誤り。江本・兪本がすでに同様に校訂する。　○別嫁一（子）〔箇〕―「子」は、「箇」の略字體からくる誤り。江本がすでに同様に改める。

譯

生のセリフ 奥さん、わたしは行くとしよう。旦のセリフ おまえさん、どこへ行くの。生のセリフ 幷州太原府へ行って軍に身を投じるとしよう。旦のセリフ あなたが行くなら、わたしも行きます。生のセリフ 奥さん、幾山河をおまえが越えて行けっこない。旦のセリフ わたしが行けないのなら、おまえさん、何か話があれば、私にいいつけてください。生のセリフ 奥さん、わたしは行くには行くが、戻って來られない場合が三つある。旦のセリフ おまえさん、どんな三つの場合なの。生のセリフ 官を得ることができなければ戻らぬ、富貴を手に入れられなければ戻らぬ、死んだら戻らぬ。旦のセリフ おまえさん、まだ門さえ出てないのに、そんな縁起の悪い話をするなんて。生のセリフ 奥さん、おまえにいっておきたいことがさらに三つある。旦のセリフ おまえさん、さらにどんな三つのことがあるっていうの。生のセリフ まず第一に、おまえは身重、もし生まれたのが女であれば、おまえの好きなように再婚するがいい。もし生まれたのが男であれば、どうあろうと引き取って、我が劉家の祭祀を引き繼がせなさい。旦のセリフ おまえさん、あなたのいっていることは間違ってるわ。男の子でも一家の礎、女の子でもあなたの劉家の礎よ。おまえさん、三つめのことって何。生のセリフ 三つめは、いうのはかまわないが、いえば半年の夫婦の恩愛も消えてしまうだろう。旦のセリフ とにかくいってください。生のセリフ 奥さん、お義兄さんお義姉さんが再嫁を迫って、もしおまえが耐えきれなければ、劉知遠なんかよりましな男を選んで再婚しなさい。旦のセリフ ちっ。

【旦唱】

13【(醉扶歸)〔二犯獅子序〕】你說話、太無情。

【生白】娘子、不是我無情、是你哥嫂逼勒我無情。【旦唱】(止)〔指〕望一勞(未)〔永〕定。寧死如何交我再嫁人。奈我腹中有孕。怎交我兒女隨別姓。你出言忒(霎)〔煞〕(時間)相輕。這恩情如鹽落井。【合】分別後各辦志誠。便做道鐵石人心腸、也須交淚淋。【生唱】

14【〔換頭〕】上告賢妻聽。休爲我憂成病。你哥哥浪頭緊。只怕你口說無憑。我去後你又孤(單)〔另〕。怕躭閣了兩下裏成病。【合】分別後各辦志誠。便做道鐵(万)〔石〕人心腸、也須交淚淋。【旦唱】

15【〔換頭〕】叫天天不應。天不應地不聞。打罵奴何安穩。正是細思量起〔□〕。恨只恨奴家忒薄命。(悶歸)〔關閨〕房獨守孤燈。怎禁受凄涼光景。【合】分別後各辦志誠。便做道鐵石人心腸、也須交你淚淋。【(豆)〔寶〕老(生)〔上〕唱】

16【過(站)〔賺〕】去(城以)〔程已〕緊。李三公多憐憫。有些小盤纏送與您。

【旦白】劉知遠、三叔公使(豆)〔寶〕老送盤纏來了。【生白】(豆)〔寶〕公、誰交你送來。【(寶白)】李三公叫老夫送十兩白銀一套襖子、與劉姐夫餞行。【生唱】

這恩(得)〔德〕、山高海樣深。生死難忘叔丈人。(豆)〔寶〕公、你與我回言拜稟。

【(豆)〔寶白】】叫老夫怎麼說。【生唱】

我劉知遠得官後、結草啣環拜謝您。

【(豆)〔寶〕白】老夫回去。(緊)〔謹〕領回稟。【(豆)〔寶〕下】【生白】娘子、我去也。【旦白】丈夫、你去、好歹送你(已)〔幾〕步。【旦唱】

17【〔金蓮子〕】君去後、何日相逢得見您。痛傷情。忍〔□……〕。

【生白】娘子、請行。【生唱】

18【〔前腔〕】但行程。登(水)〔山〕渡水莫暫停。天憐念、把名利暫行。回歸此處(在)〔再〕歡慶。【旦唱】

19【〔換頭〕】共乳同胞一母生。今日(元)〔緣〕何反面(青)〔情〕。將恩愛、(反)〔翻〕成做畫餅。只愁別時容易瘦伶仃。【生唱】

20【〔前腔〕】你如今。閑言浪語少要聽。休急悶。且將息你身懷孕。回歸此處(在)〔再〕歡慶。【旦唱】

21【〔換頭〕】叮嚀祝付三兩行。閑花野草少要攀。將恩愛、休做等閑。只愁別時容易見時難。【生唱】

22【尾聲】生離死別該前定。未知何年月日得見您。就是鐵打心腸也淚傾。

【生白】娘子、麻鞋緊繫(布娘)〔步青〕雲。【旦白】楊柳樓前問(的)〔信〕音。流淚眼(關)〔觀〕流淚眼、(痛)〔斷〕腸人送斷腸人。【生下】

23【臨江仙】[白] 郎去也、淚交流。馬行十步九回頭。歸家不敢高聲哭、閣淚汪汪不敢流。[下]

韻 13～20·22—庚亭、眞文、侵尋韻。21—干寒、江陽韻。23—鳩侯韻。

校記 13—汲本、始譜、成譜、定譜。○【醉扶歸】汲本·成譜·定譜【獅子序】、始譜【二犯獅子序】 ○「你」諸本「伊」 ○「止望一勞未定」汲本·成譜·定譜「又道是一牢永定」、始譜「又道是一言爲定」 ○「寧死」諸本「寧死後」 ○「交」始譜·成譜·定譜「教」 ○「我再嫁人」汲本「我改嫁人」、始譜「改嫁別人」、成譜·定譜「改嫁他人」 ○「奈我」汲本「是我」、始譜「況奴」、成譜·定譜「況我」 ○「交我兒女」汲本「交兒女」、始譜「教我兒女去」、成譜·定譜「教兒女去」 ○「隨別姓」諸本「從別姓」 ○「你」始譜「伊」 ○「出言」汲本·成譜·定譜「出言語」 ○「忒霎時間相輕」汲本「忒煞傷情」、始譜「忒煞相輕」、成譜·定譜「忒傷情」 ○「恩情」汲本·成譜·定譜「恩德」 ○「分別後」諸本「分別去」○「志誠」成譜·定譜「一箇志誠」 ○「便做道」汲本「便做」、始譜「便做了」、成譜·定譜「便」 ○「鐵石人」諸本「鐵石」○「交淚淋」汲本「交淚零」、始譜「教我淚零」、成譜·定譜「教淚零」

14—汲本、始譜。 ○【【換頭】】汲本【前腔】、始譜【紅獅兒】○「賢妻」汲本「妻妻」 ○「休爲我憂成病」汲本「怕你執不定」、始譜「怕你心不定」 ○「哥哥浪頭緊」汲本「哥嫂忒毒狠」、始譜「哥嫂浪頭緊」 ○「怕」汲本「恐」 ○「憑」汲本「憑准」 ○「我去後你又孤單。怕躭閣了兩下裏成病」汲本「我獨自守孤另。恐躭閣兩下成病」、始譜「卻擔閣兩下成病」 ○「[合] 分別後各辦志誠。便做道鐵万人心腸、也須交淚淋」汲本「[合前]」、始譜「分別去各辦志誠。便做了鐵石心腸、也須教我淚零」

16—汲本、成譜、定譜。 ○【過站】汲本【入賺】、成譜·定譜【連枝賺】 ○「去城以緊」諸本「去程已緊」 ○「有些小」諸本「些少」 ○「送與您」汲本·成譜「相贈恁」、定譜「相贈您」 ○「恩得」諸本「恩德」 ○「山高」諸本「山樣高來」 ○「叔丈人」諸本「叔丈恩」 ○「豆公、你與我回言拜稟」汲本「你與我回言拜稟」、成譜·定譜「你與我、回言多拜稟」 ○「我劉知遠得官後、結草啣環拜謝您」汲本「異日身榮來報恩。謹依臺命、謹依臺命」、成譜·定譜「異日身榮報大恩。謹依臺命」

18—汲本、成譜。 ○【【前腔】】諸本【金蓮子】 ○「但行程」汲本「辦登程。辦登程」、成譜「辦登程」 ○「登水渡水」諸本「渡水登山」 ○「天憐念」汲本「天憐念、天憐念」○「把名利暫行」諸本「名利早成」 ○「回歸此處在歡慶」汲本「回歸此日再歡慶」、成譜「[合] 回歸此日再歡慶」

19―汲本、成譜。　○「共乳同胞一母生」諸本「叮嚀囑付三四聲」　○「今日元何反面青」諸本「野草閑花莫要尋」　○「將恩愛」汲本「將恩愛、將恩愛」　○「反成做」諸本「翻成作」　○「只愁」汲本「只恐」、成譜［㕣只恐］

22―汲本。　○「該」汲本「皆」　○「就是鐵打心腸也淚傾」汲本「鐵石心腸也淚零」

註　○【(醉扶歸)(二犯獅子序)】―汲本・成譜・定譜は【獅子序】に作り、始譜は【二犯獅子序】に作る。始譜に從って【二犯獅子序】とした。始譜は二曲目を【紅獅兒】としているが、二曲目・三曲目は、一曲目の冒頭「三、三。」句が、五字叶韻句にかわっていると考えられるので、ここではこの二曲を【換頭】とした。ただし二曲目は合唱の前に一句の脱落があると考えられる。また、二曲目第五句は叶韻句であるべきなので、汲本に從って「孤單」を「孤另」に校訂し、三曲目第四句も叶韻句であるから、句末に空格を一字補った。校記參照。　○一勞(未)(永)定―「一勞永逸」と同意で、一時の苦勞によって永き安樂を得る、の意。後漢・班固「封燕然山銘」(『文選』卷五六)に、漢・揚雄の「上書諫勿單于朝」(『漢書』卷九四下「匈奴傳」(下)所引)に見える表現を踏まえて「茲れ一たび勞して久しく逸んじ、暫く費やして永く寧らかなりと謂うべし」という。(漢)參照。また『荆釵記』第二八出【勝如花】第二曲にも「我爲絕宗派、結婚姻。指望一牢永定」とある。　○寧死―「任死」「只管」の意。　○你出言忒(憂)(煞)(時間)相輕―始譜が引く【二犯獅子序】は、この句を七乙とし、「伊出言忒煞相輕」に作る。これに從って「時間」を衍字とした。なお、諸本も「憂」を「煞」に作る。校記參照。　○恩情如鹽落井―常語。始譜「仙呂入雙調過曲」【錦上花】の條に引く『王祥臥氷』に「把好恩情如鹽落井」とあり、『雍熙樂府』卷一五【一江風】「盼望」第二曲に「恨薄情一似鹽落井」、同卷一六【恨更長】「感恨」に「恩情悄似鹽落井」とある。　○辦志誠―前稿第三出「但(辨)(辦)志誠心……何勞神不喜」の註參照。　○便做道鐵石人心腸―「便做道」は、たとえ、の意。(匯)參照。「人」は第七出同樣、衍字とすべきであろう。前稿第七出「鐵石人五臟心不善」の註參照。　○浪頭緊―「風聲緊」と共通したニュアンスを持つであろうが、「浪頭緊」の用例は見ない。　○口說無憑―常語。(漢)參照。　○叫天天不應天不應地不聞―常語。唐・戎昱「苦辛行」(『樂府詩集』卷三五)に「面を仰ぎて天に訴えども天は聞かず、頭を低れて地に告げども地はもの言わず」とあり、『清平山堂話本』「西湖三塔記」に「宣贊叫天不應、叫地不聞、正煩惱之間、只見籠邊卯奴道、『哥哥、我再救你』」とある。　○正是細思量起(□)―この一句は叶韻句でなければならないので、いま假に「因」の脱字を想定して譯をつけた。なお、「起因」は「原因」と同意。　○(悶歸)(關閨)房―江本がすでに「歸」を「閨」に改める。ここでは文脈により「悶」も「關」に改めた。　○【過(站)(賺)】―汲本は【入

賺】、成譜・定譜は【連枝賺】とし、兪本は【過賺】に校訂する。成化本第四出第3曲に【(遇帖)(過賺)】の曲牌があるので、ここでは假に兪本に從った。ただし、本曲は【賺】の格律と必ずしも合致しない。　○【金蓮子】―原文では曲牌名の表示を缺くが、江本・兪本の校訂に從い、【金蓮子】の曲牌名を補った。ただし、【金蓮子】の格律からいえば、一曲目は第一句目「後」が失韻である可能性があり、また曲文の字數句數が足りず、「忍」字以後に文字の脱落があると思われる。なお、二曲目・五曲目を汲本・成譜は【金蓮子】として引き、成譜はその案語中に第一句が三字句のもの(二曲目)は「正體」、七字句のもの(五曲目)は「換頭」であると述べる。三曲目と四曲目は、校訂しうるテキストがないが、格律上、【金蓮子】の「正體」と「換頭」であると見做せるため、それぞれ曲牌名を補った。また、【二犯獅子序】から【尾聲】までは一套を成していると思われる。このうち第21曲は、他曲と脚韻を異にするが、一套の中で韻が變化する例は『張協狀元』第一二出・第五一出等にも見られ、南曲系の套數構成の特徴である。なお、この第21曲は、汲本の【前腔】(成譜も「又一體」として引く)と共通した曲辞をもつが、韻を異とするので別曲と考え、校記からは除外した。　○把名利暫行―待考。この一句はどのような句づくりになっているのかよくわからない。何らかの誤りを含むだろう。ここでは、後文(第十出)に見える成語「人被利名來」の意として解釋した。第十出「五里一雙牌……人被利名來」の註參照。　○(反)(翻)成做畫餅―常語。『荆釵記』第九出【尾】に「誰想番成作畫餅」とある。　○將息―「保重」の意。(匯)參照。　○別時容易見時難―成語。前稿第八出註參照。　○生離死別該前定―「生離死別皆前定」は常語。ちなみに、兪本・江本は汲本に從って「該」を「皆」に改める。○就是鐵打心腸也淚傾―常語。『宦門子弟錯立身』第九出【解三酲】に「便做鐵打心腸珠淚傾」とあり、元・羅燁『醉翁談錄』甲集卷一「小說開闢」の條に「說國賊懷奸從佞、遷愚夫等輩生嗔。說忠臣負屈喇冤、鐵心腸也須下淚」とある。　○麻鞋緊繫(布娘)(步青)雲……(痛)(斷)腸人送斷腸人―生と旦の退場詩。「流淚眼觀流淚眼、斷腸人送斷腸人」は、常語。元本『琵琶記』第二八出退場詩、『荆釵記』第一五出に同じ表現がある。なお、「斷腸人送斷腸人」の一句については、『中原音韻』「作詞十法」「定格」が引く【小桃紅】「情」詞にも「斷腸人寄斷腸詞」と見え、かなり人口に膾炙した常語であったと思われる。また、「娘」は文意によって、「的」「觀」「痛」は汲本によって改めた。江本・兪本がすでに同樣に校訂する。　○【臨江仙】百―本曲は「三、三。七。七、七。」というきわめて起源の古い俗曲の格律をとる。この格律は、早く敦煌出土の變文曲に見られ、田中謙二は韻律的觀點からの分析を通じて、冒頭の三字句二句が七字句一句からの派生である可能性を指摘する(「變文曲の一句法について」『田中謙二著作集』第二卷、汲古書院、二〇〇〇)。成化本にお

いて、後段第三七葉bに見える【臨江仙】が、本曲と曲辭をほぼ同じくし、かつ冒頭を七字句とする「七。七。七、七、七。」の格律をとることは、このことを示す例と言えよう。なお、田中は同文で「三、三。七。七、七。」の格律をとる初期詞牌の例として【搗練子】【解紅】【紅裹子】等を擧げるが、「三、三。七。七、七。」、「七。七。七、七。」いずれにしても、曲牌や詞牌の【臨江仙】の格律に合致しない。ここでは、本曲に後段の【臨江仙】との格律上の整合性が認められること、および、他の牌名に改める根據に缺けることから、あえて校訂しなかった。また、この一首はおそらく詞である。「白」は「旦」の誤りとも考えられるが、生が退場した後であるので、旦が詞を退場詩として朗唱したものと考えた。　○馬行十步九回頭……閣淚汪汪不敢流―別離の場面における一種の常套表現。元本『琵琶記』第五出【鷓鴣天】に「正是馬行十步九回頭。歸家只恐傷親意、閣淚汪汪不敢流」とある。なお、『清平山堂話本』「柳耆卿詩酒玩江樓」冒頭の七言詩には、「萬種風流觀不盡、馬行十步九蹉跎」という。ここにいう「馬行十步九回頭」もあるいはこれと同じ含意かもしれない。

譯

旦のうた

13【二犯獅子序】あなたのいってることは、なんて薄情なのでしょう。

生のセリフ　奥さん、わたしが薄情なのではない、おまえの兄と兄嫁がわたしを薄情にしてしまったんだ。

旦のうた

「はじめに苦勞しておけばあとが樂」というではありませんか。どうしてひたすら再嫁しろというのでしょう。いかんせんわたしのお腹には赤ちゃんが。どうして我が子を別姓にできましょう。あなたの言葉はわたしをひどく馬鹿にしているわ。この恩愛も井戸に落ちた鹽のようなもの。合唱　別れた後も各々眞心をつくしましょう。たとえ鐵や石の心根の人でも、涙を流さずにはいられまい。

生のうた

14【換頭】賢妻に告げよう。我がために憂えて病にならぬよう。義兄さんはおまえへの風あたりが強い。おまえの今の言があてにならぬのが心配だ。わたしが行けばまたおまえは一人。このままでは互いに病になるやもしれぬ。合唱　別れた後も各々眞心をつくしましょう。たとえ鐵や石の心根の人でも、涙を流さずにはいられまい。旦のうた

15【換頭】天に呼びかけても天は應えない。天は應えず地も應えない。ののしられてどうして大人しくしていられましょう。ことの始まりに心をめぐらせば。ただわたしの運のつたなさが恨めしい。寢屋を閉ざして空房を守る。どうしてこのさびしさに耐えることができましょう。合

唱 別れの後も各々眞心をつくしましょう。たとえ鐵や石の心根の人でも、涙を流さずにはいられまい。 寶老が登場してうたう

16【過賺】もう出發だ。李三公は憐れみ深く。いささかの路銀をそなたにおくられた。

旦のセリフ 劉知遠、三番目の叔父上がこの寶のおじいさんに路銀をもって來させました。 生のセリフ 寶のおやじさん、誰があなたに送り屆けさせたんですか。

寶老のセリフ 李三公がわたしに十兩の銀子と綿入れを劉の婿どのに餞別として送り屆けさせました。 生のうた

この御恩は、山のように高く海のように深い。死んでも忘れ難い叔父上の御恩。寶のおやじさん、わたしの言葉をお傳えください。

寶老のセリフ どう申し上げたらよろしいでしょうか。

生のうた

わたくし劉知遠が官を得たら、ご恩に必ずや報いましょうと。

寶老のセリフ わたしは歸ります。謹んでご報告いたしましょう。 寶老退場 生のセリフ 奥さん、わたしは行きます。 旦のセリフ あなた、行くのでしたら、そこまでお送りします。 旦のうた

17【金蓮子】あなたが行ってしまったら、いつの日めぐり會えるでしょう。痛む心で耐え忍ぶ。

生のセリフ 奥さん、お先にどうぞ。 生のうた

18【前腔】ただ進み行き。山越え川越えすこしも止まることはない。天も憐れめ、名利に引かれてしばし行く。ここに戻ればまた仲むつまじく。 旦のうた

19【換頭】同じ乳で育ち母を同じくしたのに。今になってどうして仲たがいするのでしょう。恩愛が、繪に描いた餅になってしまった。ただ別れの易きに流されてやせ衰えるのが憂わしい。 生のうた

20【前腔】おまえ今は。繰り言をいってはならない。あせり惱むな。大事になさいおまえは身重。ここに戻ればまた仲むつまじく。 旦のうた

21【換頭】ねんごろに二言三言申しましょう。あだ花は折らないように。恩愛を、おろそかにはしないよう。ただ別れは易くまみえるは難いのが悲しいだけ。 生のうた

22【尾聲】生離死別はとうから定められている。いつの日あなたにめぐり會えるかもわからない。たとえ鐵の心でも涙を流すというやつだ。

生のセリフ 奥さん、ぼろぐつをきつく縛り出世の道を行くとします。 旦のセリフ 別れた楊柳樓で知らせを待ちましょう。涙目が涙目を見、斷腸の思いで斷腸の

戀人を送るというもの。生退場

23【臨江仙】旦のセリフ あのひとは行ってしまった、涙がしとどに流れる。駒の十歩に九度は振りかえっているだろう。わたしは家に歸っても泣きわめくまい、あふれる涙を押しとどめて流すまい。退場

第十出〔生〕

生上唱

1【集賢賓】麻鞋緊繫一似飛。只得步(碾)〔蹍〕登程、野草閑花愁滿地。過前村小橋流水。(魚)〔漁〕翁釣叟。敲(零)〔榔〕板歌聲(謠役)〔搖拽〕。(看)〔堪〕畫處。(搖)〔遙〕望遠浦帆歸。

2【前腔】李弘〔一〕不恨你來卻恨誰。此恨何日忘之。話別叮嚀情慘凄。難割捨少年賢妻。我須行行淚(湮)〔垂〕。這兩日越添上(憔)〔憔〕悴。他那里。日日寸心千里。

落詩 五里一雙牌。磨穿(巳)〔幾〕對鞋。雁飛不到處、人被利名來。〔下〕

韻 機微(拽)、灰回、鳩侯、居魚、支時韻。「程」は失韻。

校記 汲本。 ○「步碾」汲本「步輦」 ○「魚翁」汲本「漁翁」 ○「敲零板歌聲謠役」汲本「動浪板歌聲搖拽」 ○「看畫處」汲本「堪玩處」 ○「搖望」汲本「遙望」 ○【前腔】汲本【前腔】 ○「李弘」汲本、無 ○「情慘凄」汲本「心慘悽」 ○「難割捨」汲本「撇不下」 ○「我須行行淚湮」汲本「行行淚滴」 ○「這兩日越添上憔悴」汲本「我爲你越添憔悴」 ○「他那里。日日寸心千里」汲本「思念憶、眞箇是寸腸千里」

註 ○【集賢賓】―本曲は、格律からいえば第二句目の「程」が失韻であり、別の字に校訂すべきかもしれないが、汲本が同じ字に作るため改めなかった。また、二曲目冒頭の「李弘〔一〕」の句には、文脈から「一」を補い、三字を襯字とした。なお、機微・支時・灰回・居魚各韻の通押、並びに居魚韻と鳩侯韻の通押は通俗文學では散見されるが、本套數のようにそれらすべてが通押される例はまれであろう。本套數はその格律からすればすべてが通押すると考えざるを得ない。 ○只得步(碾)〔蹍〕登程―「碾」を汲本は「輦」に作るが、字形と文脈からすれば「蹍」字に校訂すべきであろう。汲本がなぜ「輦」に作るのか、よくわからない。 ○野草閑花愁滿地―常語。普通は「野草閑花滿地愁」というが、ここでは押韻の都合上字句が入れかわっている。この句は、金・李俊民『莊靖集』卷四「袁景先東歸喪馬」詩にもとづき、元刊本『范張鷄黍』第三折【勝葫蘆】や、『哭存孝』第二折にも見える。 ○敲(零)〔榔〕板歌聲(謠役)〔搖拽〕―「零」は、江本・兪本に從って「榔」に校訂した。「榔」は「鳴

櫓」の語で傳統文學に散見され、李善はこの字に「長木」と註し(『文選』卷一〇、潘岳「西征賦」註)、また一說に「船板」という。「鳴櫓」は、船體をたたいて拍子をとること。また、汲本に從って「謠」を「搖」に、「役」を「拽」に改めた。ちなみに、「役」は『中原音韻』では齊微韻(入聲作去聲)、「拽」は車遮韻(入聲作去聲)に列せられる。「役」と「拽」は、成化本のなかでは同音なのであろう。　○(看)(堪)畫處(搖)(遙)望遠浦帆歸―「遠浦帆歸」は、宋・宋迪「瀟湘八景圖」の畫題のひとつ。この「瀟湘八景圖」に關しては、宋元以來多くの題畫詩が作られたほか、『青衫淚』第三折【水仙子】に八景すべての畫題が詠み込まれるなど、俗文學中にも散見される。　○落詩―「落詩」は、退場詩。明・王驥德『曲律』に「論落詩」という一條があり、「落詩は、亦た惟だ『琵琶』のみ體を得たり。每折、先ず古語二句を定下(お)き、卻(すなわ)ち二語を其の前に湊(あ)わす。惟だに場下の人 曉り易きのみならず、亦た優人をして記(おぼ)え易からしむ」という。なお、南戲系の一般のテキストでは「詩曰」とは標記するが、「落詩」の例はあまり見ない。　○五里一雙牌……人被利名來―「五里一雙牌」は、「五里單牌、十里雙堠」の常語(『張協狀元』第五出)に從って、「雙」を「單」に改めるべきかもしれない。後半二句は成語。『張協狀元』第二二出退場詩に「正是雁飛不到處、人被利名牽」、『小孫屠』第四出退場詩に「雁飛不到處、人被利名牽」とあるように、普通は「來」を「牽」に作るが、ここでは前半の「牌」「鞋」と押韻するため、「來」字が用いられている。

譯

生が登場してうたう

1【集賢賓】草鞋をきつく結んで飛ぶがごとく。ただひたすら先を急ぎ、野の草花がはびこるように愁いが胸に滿ちる。前の村を過ぎれば小橋に流水。漁翁に釣人。遠くから聞こえてくるのは船板を叩いて歌う聲。まこと畫になるのは。遠くの港へと歸っていく帆影。

2【前腔】李弘一よおまえを恨まなければ誰を恨むというのか。この恨みはいつになったら忘れられよう。悲しくもねんごろに別れを告げ。若い妻への思いが斷ち切り難い。わたしはきっと歩きつつ涙を流し。この數日で更に痩せ衰えたにちがいない。彼女はといえば。日々心を千里に飛ばしていることだろう。

落詩 五里ごとにふたつの標識がある。何足もの草鞋がすり破れた。雁さえ飛んで來られないところに、人が功名に引かれてやってくる。退場

第十一出〔末(刀斧手)、外(岳節度使)、二淨(小王兒・小張兒)、生〕

末上白 嫠嫠(唖)(衙)鼓響、公吏兩邊排。閻王生死殿、不偌東嶽(挾)(攝)魂臺。小人是岳節使總兵官手下刀斧手的便是。打掃廳堂乾淨、等待大人昇堂。外扮岳節使上開唱

1【梁州令】(字)(掌)管三軍膽氣雄。有千里(滅)(威)風。奉朝□見招軍。免不的尊王命令。

外白 在朝天子三宣、(間)(闖)外將軍一令。老夫姓岳名滅、官封節度使之職。因爲反了山東兖州府蘇林·袁角兩員(贓)(賊)將、無人收捕、奉朝廷(名)(明)有旨意、招集義軍三千。不免叫過手下。左右、那里。末白 廳上一呼、堦下百(納)(諾)。(伏)(覆)大人、有何鈞旨。外白 如今朝廷招集義軍三(十)(千)、便替我教場門上掛起榜文、扯起令字旗、貼起招軍牌子。不許(爲)(違)悞。即去便來。末白 小人理會得。來到教場門上。不免掛起榜文、扯起令(子)(字)旗。只得等候看有甚麼人來。二淨上 投軍、投軍、投軍。末白 那里人氏。淨白 小人是山東濟南府歷城縣人氏。末白 那位是那里人氏。淨白 小人是蘇州府常熟縣人氏。末白 等待我去通報大人知道。報。外白 報甚麼。末白 外邊有投軍的。外白 着他進來。末白 你二人進來、老大人叫。二淨白 大人、拜揖。外白 那鄉人氏。淨白 一箇是山東濟南府歷城縣人氏、姓王、一箇是蘇州府(長)(常)熟縣人氏、姓張。外白 收了上上名。(王)(末) 新收了小王兒一名、小張兒一名。外白 軍馬(以)(已)勾了。左右、收了榜文、(洛)(落)了令(子)(字)旗。但是來投軍的、不用了。(末白)小人理會得。(做收榜文科) 生上白 心慌來路遠。長官、小人是投軍的。來遲了些、煩通報通報。末白 不用人了。生白 長官、無奈何。通報通報。末白 唱(唱)(喏)、我纏你不過。你等着、我去報(伏)(覆)。報。外白 報甚麼。末白 外面有箇投軍的等候。外白 噲。弟子孩兒。軍馬(以)(已)勾、吾不用了。末白 大人、(道)(倒)是一箇好漢子。外白 (計)(既)是好漢、着他進來。末白 小人知道。投軍的、(看)(着)你進來。生白 老爹、拜揖。外白 是好一箇漢子。只是來的遲了、也罷。留你在長行隊里。你姓字名誰、那鄉人氏。生白 小人是徐州沛縣沙陀村人氏、姓劉名(知)遠、喫糧名字劉(見)(健)兒。外白 (計)(既)是這等、收你在長行隊里。日間(替)打些馬草、夜晚提鈴喝號。等你久後有功、再做商量。生白 小人理會得。外白 大小三軍、聽吾將令。甲馬不得交頭接耳、不得語笑喧嘩、弓弩上弦刀要出鞘。

詩白 身(才)(材)相貌實堪誇。喊號提鈴最可(加)(嘉)。正是學成文武藝、果然(賀)(貨)與帝王家。亟下

韻 東同、眞文、庚亭韻。

校記 汲本。○【梁州令】汲本【梁州序】　○「字管」汲本「掌握」　○「滅風」汲本「威風」　○「奉朝□見招軍。兎不的尊王命令」汲本「朝廷敕命守山東、咱不兎行吾軍令」

註 ○嫠嫠(啞)〔衙〕鼓響……不偌東嶽(挾)〔攝〕魂臺―元曲の裁判シーンに頻見される登場詩。『蝴蝶夢』第二折、『魯齋郎』第四折に、包待制に扮した外の登場詩として「嫠嫠(一作咚咚)衙鼓響、公吏兩邊排。閻王生死殿、東嶽攝魂臺」とある。それに従って「啞」を「衙」に、「挾」を「攝」に改めた。また、成化本第四〇葉bにこの四句と同じ詩が見えるが、そこでは「不偌」の二字は無く、本出の「不偌」は衍字である可能性が高い。ただし、『劉知遠諸宮調』第一【瑤臺月】に「叫一聲不若春雷」、永樂大典戲文『錯立身』第二出に「不若姮娥離月殿」、『清平山堂話本』「西湖三塔記」に「不若裁成鮮鮮麗錦」とあり、これらの「不若」は「若」と同意のようである。ここにいう「不偌」もこの「不若」かもしれないので、衍字とはしなかった。なお「閻王生死殿」と「東嶽攝魂臺」は、ともにお白洲をたとえたもの。

○外扮岳節使上開(唱)―文脈上「唱」の字を補った。ト書きの「開」については、前稿第一出「扮末上開云」の註参照。　○【梁州令】―原文には曲牌名の記載がなく、汲本は【梁州序】とするが、その格律に合わない。詞牌【梁州令】の後関に格律が合致するため、假に【梁州令】に改めた。　○奉朝□見招軍兎不的尊王命令―「奉朝□見招軍」句は、詞牌【梁州令】の格律に従えば六字句であるため、原文の空格は一字分とみなした。この二句は、空格もあり、このままでは意味がわかりにくい。ここでは、假に「□見」を「旨意」、「尊王」を「遵奉」の誤りとして解釋した。　○在朝天子三宣(間)〔闖〕外將軍一令―常語。外の登場詩の役割を果たす。『博望燒屯』第二折に「休誤在朝天子宣、莫違闖外將軍令」、『蕉帕記』第一七出に「朝中天子三宣、闖外將軍一令」とある。　○姓岳名減―江本は、汲本に従って「減」を「黙」に改める。　○奉朝廷(名)〔明〕有旨意―「名」のままでは意味が通じ難い。吏牘體では「明」は、明文化、の意味で用いられるため、文字を改めた。なお、江本・兪本は「名」を「命」に校訂し、「命」で斷句する。　○廳上一呼堦下百(納)〔諾〕―常語。『舉案齊眉』第二折に「堂上一呼、階下百諾」、『宦門子弟錯立身』第二出に「廳上一呼、堦下百諾」とある。なお、「納」は『中原音韻』では家麻韻(入聲作去聲)、「諾」は同じく歌戈韻(入聲作去聲)に屬する。成化本の中では同音なのであろう。　○教場門上掛起榜文……貼起招軍牌子―「教場」は、練兵場。(漢)参照。「令字旗」は、命令を發する際に用いる旗。「令」の字が書かれているので「令字旗」という。宋・洪邁『夷堅支志』甲卷三「王宣大尉」の條に「蔣訓練 城を出で、檀溪に至り水濱に飲す。一黄衣の卒 令字旗を持ち大呼して『都統喚ぶ』

と曰う」、『飛刀對箭』楔子に「令字旗催促先鋒、帥字旗爲軍中眼目」とある。　○二淨上―成化本においては、概ね道化役に「淨」と「丑」の脚色名があてられているが、本第十一出と第十二出のト書きでは、「淨」と「丑」が區別されず共に「淨」と書かれ、二人の道化役を總稱して「二淨」と標記する。そのことからすれば、この二つの出では、道化役の「打諢」が省略されている可能性がある。　○上上名―二字目の「上」は、原文ではおどり字。「上名」で、登錄する、の意と解したが、あるいは「上」に誤りがあるかもしれない。　○但是―「但」は、「凡」と同義。(宋元)參照。　○心慌來路遠―成語。『望江亭』第二折に「心忙來路遠、事急出家門」、『香囊記』第二七出に「心慌來路遠、事急出家門」とある。　○宋白 唱(唱)〔喏〕―「唱唱」を、江本・兪本は「喏喏」に改めるが、「喏」は上官に對して挨拶する際に發する聲であり、ここで末が生に對して「喏」というのは不自然である。ここでは「唱唱」を「唱喏」と校訂したうえで、「宋白」と順序を入れ替えて、生のト書きであるとして解釋した。　○我纏你不過―「纏」は、相手にする、あしらう、の意。『金瓶梅』第五九回に「瓜兒只揀軟處捏、俺每這屋裏是好纏的」とある。(漢)參照。　○長行隊―步兵隊、の意。宋・金時代に特徴的な語であり(『宋史』『金史』の「儀志」「兵志」等參照)、元代では「長行馬」の例はあるが、步兵を指して「長行」とは言わないようである。ここの「長行隊」並びに後文の「喫糧」の語は、成化本『白兎記』がもとづいたテキストの性格を考える上で重要な手がかりとなるだろう。　○姓字名誰―名前をたずねる際の常套表現。敦煌文書スタイン二一四四「韓擒虎話本(擬題)」に「住居何處、姓字名誰」とあるほか、成化本第四一葉b、並びに『智勇定齊』第二折、『符金錠』第三折等に同樣の表現が見られる。なお、江本・兪本は「字」を「甚」に校訂する。　○徐州沛縣沙陀村人氏―劉知遠が徐州沛縣の人ではなく、また徐州沛縣に沙陀村は存在しないことは言うまでもない。　○喫糧名字劉(見)(健)兒―「喫糧」は、金代の制度「射糧」のことであろう。『金史』卷四二「儀衛志」(下)「百官儀從」の條に「凡そ內外の官、親王自り以下は、傔從 各おの名數に差等有り。而るに朱衣直省 與からず。其の賤なる者は、一に引接と曰い、……二に擡攏官と曰い、……三に本破と曰い、……四に公使と曰い、……五に從己人力と曰い、……。五等は皆な射糧軍を以て充つ。其の軍は物力を驗して以て攻討を事とするに非ず。特に民の年十七以上、三十以下の魁偉壯健なる者を招募し、收して刺し、資糧を以て之に給す。故に射糧と曰う」とある。劉知遠が射糧軍に身を投じたという情節は、すでに『劉知遠諸宮調』に見え、その第二【高平調】【賀新郎】に「太原府文面做射糧」とある。また「射糧軍」が元曲に登場する例としては、元刊本『遇上皇』第二折【尾】に「趙上皇你穩坐皇都。怎知這哐風雪的射糧軍干受苦」、『後庭花』第二折【混

江龍】に「你箇身着紫衣堂候官。欺負俺這面雕金印射糧軍」とある。また「健兒」は、兵卒、の意。『大唐六典』巻五「尚書兵部」に「天下の諸軍に健兒有り」、唐・杜甫「哀王孫」詩（『杜詩詳註』巻四）に「朔方の健兒 好身手、昔は何ぞ勇鋭にして今は何ぞ愚なる」とある。ここでは、「喫糧名字」即ち軍隊における呼び名として「健兒」の語が用いられており、同様の例としては、『奪衣襖車』第一折の狄青のセリフに「今在鞏勝營中、做一箇軍健漢、人口順、都叫我做小健兒狄青」とある。　○日間（替）打些馬草夜晩提鈴喝號―「草」「號」で押韻する韻文。成化本第三○葉b、汲本第一五出に「日間打草、夜間提鈴喝號」、汲本第三二出に「日間押馬草、夜間提鈴喝號」とある。「替」は、このままでは意味が通じ難く、右に擧げた用例でも「替」字が無いため、ここでは衍字とした。　○大小三軍……弓弩上弦刀要出鞘―將軍が軍令を下す際の常套表現。『單刀會』第三折に「大小三軍、聽吾將令。甲馬不許馳驟、金鼓不許亂鳴、不許交頭接耳、不許語笑喧嘩。弓弩上弦、刀劍出鞘、十分人人敢勇、箇箇威風」、『千里獨行』第四折に「大小三軍、聽吾將令。甲馬不得馳驟、金鼓不得亂鳴。不得交頭接耳、不得語笑喧呼。但違令、依軍令決無輕恕」とある。　○正是學成文武藝果然（賀）（貨）與帝王家―成語。『清平山堂話本』「陳巡檢梅嶺失妻記」に「學成文武藝、貨與帝王家」とあるほか、錢南揚『永樂大典戲文三種校註』（北京中華書局、一九七九）「張協狀元」第一出に「十載學成文武藝、今年貨與帝王家」とあり、その校註（三〇）においてこの成語に關する考證がなされている。

譯

末が登場してセリフを言う　ドンドンと役所の太鼓が響き、役人が兩側に並び立ちます。このお白州はまるで閻魔大王の生死殿、東嶽大帝の攝魂臺。わたくしは岳節使總兵官の下っぱ兵卒でございます。廳堂を綺麗に掃除し、官人さまのお出ましを待ちましょう。（外が岳節使に扮し登場し、開場してうたう）

1【梁州令】三軍を取り仕切り意氣軒昂。威風は千里に渡る。朝廷の命を奉じて軍をあつめます。帝の命にはしたがいましょう。

外のセリフ　お膝元では天子の三宣に從い、外地では將軍の一命で決まる。わたくしは姓は岳、名は減と申し、節度使の官職を務めております。山東兖州府の蘇林と袁角の二人が反逆して、捕える人がいないので、朝廷の明らかなるご命令に從って、三千人の軍隊を募集致します。さっそく部下たちを呼びましょう。皆のもの、どこにおる。末のセリフ　堂上で一たび呼び聲がすれば、階下で百の應答をいたします。長官さま、如何なるご用件でしょうか。外のセリフ　今、朝廷では義兵三千人を集めておるゆえ、我がためにすぐさ

ま練兵場の門に掲示を出して令字旗を揚げ、兵士募集の札を貼り付けて來い。不手際があってはいかんぞ。すぐに行ってすぐに歸って來い。末のセリフ心得ました。練兵場の門のところまでやって來ました。掲示を出して令字旗を揚げることに致しましょう。あとはどんな連中が來るのか見屆けましょう。二淨登場入隊、入隊、入隊。末のセリフどこの者だ。淨のセリフわたくしは山東濟南府歷城縣の者です。末のセリフそちらはどこの者かね。淨のセリフわたくしは蘇州府常熟縣の者です。末のセリフ長官さまに知らせに行くからしばし待っておれ。ご報告致します。外のセリフ何の報告だ。末のセリフ外に志願者が來ております。外のセリフ入らせろ。末のセリフ二人とも入りなさい。長官さまがお呼びだ。二淨のセリフ長官さま、ご機嫌よろしゅう。外のセリフどこの者だ。淨のセリフ一人は山東濟南府歷城縣の者で、姓は王と申します。もう一人は蘇州府常熟縣の者で姓は張と申します。外のセリフ任用して名前を登録するとしよう。末のセリフ新たに小王兒一名と小張兒一名とを任用いたしました。外のセリフ軍馬はもう十分だ。供のもの、掲示を回收して、令字旗を下げて來い。今から志願してきた者は、みな不採用だ。末のセリフ心得ました。掲示を回收するしぐさ生が登場してセリフを言う心あわただしく遠い道のりをやって來ました。長官さま、わたしも志願者です。來るのがいささか遲れてしまいましたが、どうかお取次ぎ下さい。末のセリフもういらん。生のセリフ長官さま、そんな殺生な。お取次ぎ下さい。揆拶するしぐさ末のセリフおまえはわしの手に負えん。待っておれ、報告に行くから。ご報告します。外のセリフ何の報告だ。末のセリフ外に志願者が控えております。外のセリフけっ。馬鹿野郎。軍馬は十分だ。俺はもう採用せんぞ。末のセリフ長官さま、でも好漢ですよ。外のセリフ好漢ならば、入ってこさせろ。末のセリフわかりました。志願者よ、中に入れ。生のセリフ旦那さま、ご機嫌よろしゅう。外のセリフなるほど好漢だな。來るのは遲かったが、まあよしとしよう。おまえを步兵隊に入れてやる。名前は何だ、どこの者だ。生のセリフわたくしは徐州沛縣沙陀村の者で、姓は劉、名は知遠、軍隊での名は劉健兒と申します。外のセリフそれならば、おまえを步兵隊に任用しよう。晝間は馬草を刈り、夜は見回りをして鈴を鳴らし大聲で叫べ。しばらくしておまえが戰功を立てれば、その時に再び相談しよう。生のセリフ心得ました。外のセリフ三軍のものは、吾が軍令を聞け。兵馬は耳

を近づけて私語したり、笑い聲を立てて騒いだりしてはならん。弓には弦を張り、刀は鞘を拂え。

詩に曰く 體格容貌はなかなか雄偉。鈴を手にし叫ぶさまはまことに立派。まさに「學藝武藝を學んで、それを帝王に貸し與える」というやつ。 一同退場

第十二出〔二淨(同前)、生、貼旦(岳秀英)〕

二淨上白 做派更次〔科〕 小張兒打頭更、我小王兒打二更、叫劉(見)〔健〕兒打三更。四更・五更都是他打。 淨叫 劉(見)〔健〕兒。 生上白 受人之托、必當終人之事。二位長官、作揖。 淨 呸、作揖、作揖。明日上陣也只作揖罷。 生白 長官、人將禮樂爲先、樹將花菓爲園。 淨白 不要講禮、如今派更次。 生白 王長官派了罷。 淨白 是小張兒打頭更、我打二更、劉(見)〔健〕兒、你打三更・四更・五更。 生白 長官、小人因何打三箇更次。 淨白 誰交你來的遲了。 小張兒做打更科 生叫 三更牌子哩。小人去處、遇着這等大雪。怎生是好。不免且去大人家小姐看花樓(一个)〔下〕避一避、(在)〔再〕去打(那)更。 生做(二)〔吨〕睡科 貼旦上〔唱〕

1【(月兒高)〔月雲高〕】獨上層樓上、看他甚行止。卻是箇巡軍、差使不由(已)〔己〕。凍(死)〔死〕街前、無人可憐你。前生想是想是脩不足。今世爲人受這等狼狽。我直不住守閨女。把爹爹衣服丟與他遮寒體。

做箇包袱〔科〕 正是天上人間方便第一。 貼旦下 生做醒科 生白 又事小人身上那得這領白袍。老爹家樓門又不曾開、地下又無人踪跡、想必是天宮上賜下來的。本待不將去、身上寒冷、又待拿去、只怕人說賊盜偷來。罷罷。應時當得下、勝似(每)〔岳〕陽(巾)〔金〕。 下

韻 支時、機微、居魚(足)、灰回韻。「上」は失韻。

校記 汲本、成譜。 ○【月兒高】汲本【月雲高】、成譜【月轉盼花期】 ○「層樓上」諸本「層樓去」 ○「看他」諸本「聽他」 ○「卻是箇巡軍、差使不由已。凍死街前、無人可憐你。前生想是想是脩不足。今世爲人受這等狼狽。我直不住守閨女。把爹爹衣服丟與他遮寒體」、汲本「仔細聽來後、 生喝號介 小旦 卻是巡更輩。喝號揭鈴、聲音振屋宇。交奴聽得心憔悴。落在長行隊。難禁這勞役。臘雪滿天飛。凍死街頭、那有人來憐你」、成譜「仔細聽來後、卻是巡更輩。喝號揭鈴、聲音振屋宇。教奴聽得心憔悴。落在長行隊。難禁這勞役。吁。臘雪滿天飛。凍死街頭、那有人來憐你」

註 ○受人之托必當終人之事―成語。『陳州糶米』第三折、元本『琵琶記』第五出等に同じ表現が見られる。 ○人將禮樂爲

先樹將花菓爲園―成語。『西遊記』第三六回に「人將禮樂爲先」とあり、『三寶太監西洋記通俗演義』第二〇回に「人將禮樂爲先、樹將花菓爲園」、『小五義』第六六回に「人將禮樂爲先、樹將枝葉爲園」とある。　○三更牌子―「更牌」は、夜警が持つ牌子。明・茅元儀『武備志』巻一一一「軍資乘」「守」「約束」「設巡官」の條に「巡邏の役を設く。尤も疎虞を恐れて門ごとに另に武職官二員を選ぶ。各おの馬匹を與え、更牌・更箭を置立す。如し東より巡りて南門に至り、時二更に値えば、東門の官一更の箭を將て交付し、南門城樓の上官驗收す。南門の官隨いて二更の牌を付して東門に與えて驗と爲さしむ。輪番迭周す。次早總巡官の處に送りて査考せしむ」とある。　○(在)〔再〕去打(那)更―兪本に從い、「那」を衍字とした。　○(一)〔盹〕睡―「一」は原文訛字。江本は「酣睡」、兪本は「盹睡」とする。ここでは文意より兪本に從った。　○凍(无)〔死〕―「無」の略字體「无」と「死」との字形の相似による誤りであると思われる。　○【(月兒高)〔月雲高〕】―本曲牌を汲本は【月雲高】、成譜は【月轉盼花期】に作る。ここでは「做箇包袱〔科〕」をト書きとし、「正是天上人間方便第一」をセリフとみなして全體を十句と考え、格律から曲牌を【月雲高】とした。なお、汲本は、相當する曲文を二曲計二十一句に作ったうえで、本曲の第七・八句を【月雲高】の【前腔】で「前生做人做人脩不足、今世裏罰令你受勞碌」の形で引き、本曲の第十句はセリフとして引く。これからすれば、本曲は元來二曲であったものが、何らかの脱落によって現在殘る成化本の曲文のかたちになったものかもしれない。また【月雲高】の格律からすれば、第一句目の「上」が失韻であるほか、第七句目が六乙になるべきである。　○差使不由(已)〔已〕―お上に仕える身では自分の思い通りにはならないことを言う常語。『秋胡戲妻』第一折に「上命官差、事不由己」、『荆釵記』第四〇出に「上命遣差、身不由己」とある。　○我直不住守閨女―待考。何らかの誤りを含むと思われる。ここでは假に「直」を「止」とし、語順を入れ替えて、「我守閨女止不住」として譯をつけた。　○天上人間方便第一―成語。元刊本『事林廣記』乙集巻上「人事類」「警世格言」「處己警語」の條に「千經萬典孝義爲先、天上人間方便第一」とあり、『誅范叔』第二折、『小孫屠』第一〇出等に「天上人間方便第一」とある。　○又事―待考。何らかの誤りを含むであろう。兪本は「有事」に校訂して斷句する。ここでは「又是」を「(蚤)〔早〕是」の誤りとして譯をつけた。　○白袍―後文では全て「百花戰袍」に作るので、ここも「百花袍」とすべきかもしれない。　○應時當得下勝似(每)〔岳〕陽(巾)〔金〕―成語。生の退場詩の役割を果たす。汲本に從って「岳陽金」に校訂した。この成語については、錢南揚『永樂大典戲文三種校註』「張協狀元」第一一出に「此雪應須還得下。果然勝似岳陽金」と見えるほか、錢南揚『元本琵琶記校註』(上海古籍出版社、一九八〇)第三二出の退場詩にも

「但願應時還得見、果然勝似岳陽金」とあり、それらの註は、「岳陽金」は元來『詩經』「魯頌・泮水」にもとづく語であると述べる。「岳陽金」は貴重なもののたとえ。成語中にいう「下」は、元來は雪や雨を指すのだろう。なお、「當得」は「應該」の意。前稿第九出註參照。

譯

[二淨が登場してセリフを言う] [夜回りをするしぐさ] 小張兒が初更の夜回りをして、俺、小王兒が二更の夜回りをする、劉健兒には三更の夜回りをやらせ、四更・五更もやつが夜回りをすることとしよう。[淨が呼ぶ] 劉健兒。[生が登場してセリフを言う] 人から頼みを受けたなら、必ず最後までやり遂げる。長官のおふた方、敬禮。[淨のセリフ] ちっ、敬禮、敬禮、(おまえは)明日出陣しても敬禮だけしておしまいか。[生のセリフ] 長官、「人が禮儀を第一とするのは、樹木が花や果實によって園林を飾るのと同じようなものである」といいます。人や世間に接するにはまず最初に禮儀を盡くさねばなりません。[淨のセリフ] 禮儀の講釋はいらん。今は夜回りだ。[生のセリフ] 王長官が行かれたらよろしいでしょう。[淨のセリフ] 小張兒が初更の夜回りをして、俺が二更の夜回りをする、劉健兒、おまえは三更・四更・五更の夜回りをするのだ。[生のセリフ] 長官、わたしがなぜ三回も夜回りをするのですか。[淨のセリフ] 誰がおまえに遲れて來いと言った。[小張兒が夜回りに行くしぐさ] [生が叫ぶ] 三更の札です。わたしが行けば、こんな大雪だ。どうしたものか。しばらく長官さまの家のお嬢さんの看花樓の下で大雪をしのぐとしよう。そのあと、また見回りに行こう。[生が居眠りをするしぐさ] [貼旦が登場してうたう]

1【月雲高】獨り高樓に登り、何をするのか見てみると。なんと見回り役の一兵卒、宮仕えはままならぬもの。通りで凍え死のうと、憐れむ人は誰もいない。前世では思うに思うに德を積むことが足りず。現世でこんな苦難を受けている。わたくし深窗のむすめも思わず。お父さまの服を彼に與えて寒さをしのいでもらいましょう。

[服をかけるしぐさ] 「天界であれ下界であれ方便が一番」と申します。[貼旦が退場する] [生が目覺めるしぐさ] [生のセリフ] 幸いにもわたしの身體の上にどこからか白い打掛けが。旦那さまの家の樓門も開いてはいないし、地面にも人の足跡はない、きっと天からの賜り物だろう。持って行くまいとすれば身體は寒いが、持って行こうとすれば人は盜人が盜んでいったと言うかもしれない。まあいいか。「降るべき時に降る雪は、岳陽の金にも勝る」ってもんだ。[退場]